

きらめき人

ひとめぐり

寄木には、震災に遭っても、ほつれない強い絆がある

はたけやま
畠山 幸男さん



「(一社)復興みなさん会」の一員(理事)として、地域の課題解消や住民交流のため積極的に活動。災害公営住宅の一人暮らし世帯を中心に巡回、見守りや暮らしの相談も行っている。

SACHIO HATAKEYAMA

震災後の大変な状況にあっても、人当たりが良く信頼の厚い幸男さんは、地域のリーダーとして活躍しており、今年4月に行政区の区長に就任した。さっそく県の助成(コミュニティ再生)をもとに、交流事業を展開。42世帯の寄木地区住民にグラウンドゴルフやバーベキュー・カラオケ大会などを呼びかけると、たくさん参加してくれて嬉しいと語る。

「約半分の世帯が高台(防集団地)に移転し環境は変わったが、和気あいあいの関係はそのまま、住民の絆はほつれることはない」と最後も笑顔だった。

「猛暑に耐え、新米できました!」

あべ
阿部 勝善さん



「稲が穂を作る大切な時期である7月に猛暑が続き、水が不足して全体的に収穫量は下がってしまった」と話す勝善さん。「品質・味は例年通りなのでぜひ楽しんでください!」と話す。

9月、南三陸の里山の入谷地区は黄金色に染まっていた。道路はコンバインと軽トラが行き交い、1年のなかで最も忙しい時期を迎えているが、どこか人々は安堵の表情を浮かべている。無事に収穫を迎えられた――。そんな思いが表情に見て取れる。

入谷地区で農業を営む阿部勝善さんその一人だ。常に新たな農業へのチャレンジを続ける勝善さんだが、今年は米だけで4つの栽培方法に挑戦した。「慣行栽培ひとめぼれ」「液体肥料100%ひとめぼれ」「液体肥料100%ササニシキ」「無農薬無肥料ササニシキ」の4つだ。

勝善さんが目指すのは、可能な限り自然と共存しながら米を育てる栽培だ。森里海の循環の輪の中にいる農業者としての役割を果たそうという思いの表れが「液体肥料100%米」だ。生ごみをメタン分解される過程で生まれる液体肥料のみを散布。化学肥料などは使わないことによって自然にやさしい農業が可能になる。「今年も問題なく収穫することができて、ひと安心」と話す勝善さん。

「南三陸のお米のいいところは、山からのミネラルたっぷりの水と、昼夜の寒暖差。自然の力でおいしいお米ができるのだから、自然を生かした栽培をこれからもしていきたい」と意気込んでいる。

KATSUYOSHI ABE

旧

歌津町寄木で生まれ育った畠山幸男さんは、宮古海員学校卒業。必要な資格を取り外国航路の船員になり、言葉の壁を感じながらも奮闘した。その後、熱海でホテル業を学び東京晴海や松島町のホテルに勤務。それまでの経験や知識を生かして勤め上げたという。

「長い間離れていた古里に戻るのが不安だったけど、温かく迎えてくれたのが嬉しかった。これからはそんな地域に溶け込んで、幸せな生活しよう」と決意した」と笑顔で振りかえる。

東日本大震災に遭い、自宅も地域も壊滅的被害を被ったが、寄木地区は昔からの契約講のつながりが強かったため一致団結して再建できた。年々子どもたちが少なくなっているが「ささよ」など伝統行事が継続できているのも地域の力だと胸を張る。